ＳＤＧｓと人権

岩本智依
（一財）同和教育振興会 理事

（1）はじめに

昨今「ＳＤＧｓ」という言葉を見ない日はありません。企業や自治体の広報誌やマスコミなどでカラフルなロゴとともによく掲載されています。また『本願寺新報』等でたびたび取り上げられており、宗派内にあっても関心の高い事柄であるといえます。「ＳＤＧｓ」とはSustainable Development Goals の略で日本語では「持続可能な開発目標」と訳されます。

しかしながらその中身や本質については、なかなか知られているとはいえない現状にあります。特に世界的な気候変動との関わりの中で記されることも多いため、「環境問題」についての言葉であると思っている人も多いようです。

ＳＤＧｓとは２０１５年に国連で採択された世界全体が直面しているさまざまな課題について、全ての国が協力して解決していこうというものであり、当然に日本もそのメンバーに含まれています。

その課題とは貧困、飢餓、保健、教育、ジェンダー、労働、水、生産と消費、エネルギー、気候変動など17の目標と呼ばれる項目があり、多岐にわたります。

そしてこれらの課題はすべて「人権」を根幹に置いて設定されたものです。なぜならばＳＤＧｓの基本原則として「誰一人取り残さない」という言葉がありますが、これは「ＳＤＧｓを理解し、これを実践するとき、人権原則である平等、そして差別を許さないという理念を中心に据える」ということを意味しています。つまりＳＤＧｓの取り組みとは人権に基づき、差別を決して許さないという立場から出発しないといけないということです。

言い換えれば「人権意識」と「差別解

放の願い」のない取り組みはどんな名称であれ、ＳＤＧｓについての活動になりえないということです。

（2）「誰一人取り残さない」の「誰一人」とは？

さて、日本政府は「ＳＤＧｓ実施指針」を発表しており、２０１９年の改訂版では八つの「優先課題」を示しています。その中の第1番目に掲げられているのが「あらゆる人々が活躍する社会・ジェンダー平等の推進」です。ＳＤＧｓに掲げられている目標では第5番目にくるこの項目を日本では優先課題として一番に挙げているのには大きな理由があります。

毎年、6月になると世界経済フォーラムが、男女格差の現状を各国のデータをもとに評価した「Global Gender Gap Report」（世界男女格差報告書）を発表し、日本国内でも広く報道されます。これは前述のようにＳＤＧｓの目標の一つであり日本では優先項目として国を挙げて取り組むべきものとされているからです。その中で日本のジェンダーギャップ指数（男女格差を数値化して性差別の現実を示す指標の一つ）は世界最低ランクであり、年々順位を下げています。当然このことは国内外においてＳＤＧｓの目標達成についてのマイナス要因として大きく批判をされていることは報道などで行われている通りです。

ところでなぜ、ＳＤＧｓの中にジェンダーつまり性差別の問題を特に挙げているのでしょうか。それはこの問題に取り組むことなくして、私たちの社会が抱える問題を解決することが不可能だからで

▶執筆者プロフィール

岩本智依
いわもと　ちえ

1979年生まれ
2005年　関西大学大学院法学研究科博士課程前期公法学専攻修了
2010年　中央仏教学院講師（～現在に至る）
　　奈良教区男女共同参画委員会委員（～現在に至る）
2015年　兵庫大学非常勤講師（～現在に至る）
2016年　同和教育振興会講師団講師（～現在に至る）
2022年　同和教育振興会理事
【著作】『念仏者と性―和讃から考えるセクシャル・マイノリティと女人往生―』
『経典にみる差別語を考える―「栴陀羅」・「女人往生」・「根欠」―』（共著）
「性差別と御同朋の教学」奈良人権部落解放研究所紀要　第32号
「能にみる中世の女人往生思想」同和教育論究　第33号
「女人垢穢思想と専修念仏」中央仏教学院紀要　第25号
「セクシャル・マイノリティと御同朋の教学」同和教育論究　第37号　他

す。

アメリカのフェミニズム経済学者であるナンシー・フォルブルがこのことについて例話として好んで語る話があります。

昔むかし、女神たちが国対抗の競技を開始しました。それは「社会を構成する全員が、みんなでどれだけ進んだか」を競うものです。集団で最も遠くへ走ることができた国の、全ての者に対して健康と財産を与えることが賞品です。ただこの競技にはゴールの場所はありませんし、いつ競技が終わるかは参加者には知らされません。

開始の合図がなるとA国は勢いよく駆けだしました。この国は「とにかくみんな全力で走れ」というものでした。先頭集団はすごい速さで他の国を引き離しましたが、すぐに子どもや高齢者が進めなくなりました。誰も走れない人を助けようとはしません。みんな自分が速く走ることに夢中で、遅れた人のことを考えませんでした。しかしレースが続くうちに勢いよく走っていた人たちもさすがに疲れてきました。ある人は疲労で、ある人はケガで、次々に倒れていき、最後には誰も走れる人は残っていませんでした。

次にB国はちょっと違う戦略をとり、若い健康な男性が全力で走れるように、女性は後方でサポートに回ることにしました。子どもや高齢者、病人、ケガをした走者などの走れなくなった人の世話は女性が担当しながら並走しました。さらに走者の男性には早く走るための報酬として「女性に対する権威と支配権力」を与えました。はじめはこのやり方は上手くいっているように見えましたが、すぐに問題が起きました。女性たちが「子どもや高齢者の世話をしなければ私たちも早く走れる。私たちが行っている世話も男性たちの早く走ることと同じくらい重要ではないか」ということに気がつき、不公平を訴えましたが男性たちは「報酬なしで早く走れるわけがない」と聞き入れませんでした。しだいに社会に対立が広がり、前に進めなくなりました。

最後のC国はスタート時には出遅れているように見えましたが、ゆっくりと、しかし着実に前進しました。最後にはA国B国よりも順調に前に進んでいました。この国は他の国とは違い、男性も女性も、全ての構成員に走ることと、走れなくなったものの世話を担うことが求められました。最初、世話は大きな負担でしたが、そうした負担とともに走ることで、お互いの間に連帯感が生ま

れました。みんなで平等に助け合いながらC国はみごと勝利を手に入れました。

これは社会で求められるケア労働について性差別と経済学の視点から考える例話ですが、それ以外にも多くの事柄を示唆するものとして性差別や労働経済の問題の中で引用されています。もちろんSDGsについてもこの視点は非常に重要視されています。

SDGsが示す私たちの社会がめざしている「持続可能な開発目標」とは、まさにこの話に設定されている「社会を構成する全員が、みんなでどれだけ進んだか」という競技の目標そのもののことといえます。その時に、どの戦術を取るべきなのか、つまり私たちがめざす社会はA、B、Cのどの国の姿なのでしょうか。

このようにSDGsの中にジェンダーというものが明記され、さらにそれに取り組もうとする日本において、このジェンダーが第1番目の「優先目標」として設定されていることは自明の理であるともいえるのです。

ジェンダー問題について解決することなくして、SDGsの推進など全くあり得ないといっても過言ではありません。

また、前述したようにSDGsの原則には「誰一人取り残さない」というものがありますが、なぜ、「誰か一人でも取り残してはダメなのか」ということがこのフォルブルの話にはとてもよく示されています。この例話における「男性と女性」や、「走れる人と走れない人」という部分は貧困、正規・非正規といった労働における差別、教育における不平等、地域格差など、すなわちSDGsに挙げられる「貧困、飢餓、保健、教育、ジェンダー、労働、水、生産と消費、エネルギー、気候変動」といった諸問題に具体的に関わるものです。「誰か一人を犠牲にする、取りこぼすこと」は「ほかの人もまた取りこぼし、犠牲にすること」に繋がっていくことになります。

つまり、ジェンダー問題に取り組むことはこれらのさまざまな差別問題に取り組んでいくことにもつながるものであり、また一方で他の問題に取り組む時にジェンダー問題への視点は必要不可欠であるということです。

（3）私たちの教団と「SDGs」

親鸞聖人は『教行信証』の中で

おほよそ大信海を案ずれば、貴賤緇素を簡ばず、男女老少をいはず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず　（『註釈版聖典』245頁）

と記し、性別や能力で優劣をつけ、誰かを置き去りにすることのない阿弥陀さまのご本願をお示しくださいました。

私たちの阿弥陀さまが願ってくださる「御同朋の社会」がめざすべき社会はフォルブルのA、B、C国のいずれなのでしょうか。

フォルブルの例話から私たちの教団を考えた時、私たちはA、B、Cのどの国に近いのでしょうか。例えば２０２３年の本願寺手帳の79頁に記載されている「寺院・僧侶一覧」によると２０２２年４月１日現在の全ての僧侶数は３万１千89人です。その中で男性僧侶２万856人、教師資格を持っているのは１万５千989人、つまり男性僧侶の75％以上が教師を取得しています。しかしながら女性僧侶は１万233人で、教師資格を持っているのは２千812人ですから、女性僧侶で教師資格まで取る人は30％未満ということです。

また役職でみると男性住職８千538人に対して女性住職は410人と５％に満たないことも明らかになっています。

これらの数字から見るだけでも私たちの教団におけるジェンダーギャップ指数は相当に低いことは明らかであり、残念ながらフォルブルの例話におけるC国には程遠いのが現実です。このまま進んでいったとき、私たちの教団はA国やB国のような末路をたどることになりかねない岐路に私たちは今立っていると言ってよいでしょう。

私たちの教団においてもすぐにでも取り組まなければいけない課題としてジェンダー平等の課題はあります。その意味でも私たちにとってＳＤＧｓは決して他人事ではありません。

またＳＤＧｓとは世界規模の社会における要請ですが、一方でなぜそれに念仏者が取り組まなければならないのでしょうか。

前述したようにＳＤＧｓとは「人権意識や差別を許さない理念を中心に据える」ということが不可欠ですが、またこの人権や差別に対する認識は私たち念仏者としての必然のものです。

親鸞聖人が「男女・老少をいはず」とおっしゃったみ教えをいただく私たちの教団に、性差別が今なお残り続けていることの意味を改めて深く問い直さねばなりません。

これまで私たちはさまざまな差別や人権の問題に取り組んできました。その根底に常にあるのが１９５０年にスタートし、70年以上続けられてきた同朋運動です。同朋運動とは単なる社会運動ではなく、「信心に基づき、部落差別をはじめあらゆる差別に取り組み、同朋教団を確立する」という同朋運動の三原則にもとづく念仏者の運動です。この同朋運動には「葬場勤行における和讃を男女で分けていたものを同一のものにする」といった性差別やジェンダー問題について取り組んできた歴史もあります。

私たち念仏者による人権や差別の問題

についての取り組みである以上、人権や差別問題に関わる運動であるＳＤＧｓにおいても、この同朋運動の原則が厳守されなければいけないことは言うまでもありません。

そしてこれまで同朋運動が示してきた大きな意義に「継続」ということがあります。先述のように同朋運動は70年以上続けられてきました。その間、教団の内外においてさまざまな変革をもたらしてきました。その同朋運動における大切なスローガンとして「同朋運動続けていくから未来がある」というものがあります。この言葉は２０１０年12月14日に本願寺聞法会館で行われた同朋運動60周年記念大会のテーマであり、これはまさに「運動とは継続である」ことの表明です。

前述のようにＳＤＧｓとは「持続可能な開発目標」と訳されますが、これは未来のために「継続」が自明である取り組みということです。すなわちこれらの取り組みは決して「一過性」のものであってはならないということを意味します。

これから私たちの教団において取り組まれる性差別の取り組みはどのようなものであるのか、同朋運動の歴史とＳＤＧｓという社会要請それぞれから、まさに「未来のためにどのように継続し、現状を変えていくのか」その点が問われているのです。

〈参考文献〉
『ＳＤＧｓと人権 Ｑ＆Ａ 地域・学校・企業から考える』松岡秀紀・岡島克樹 編著 黒田かをり 著 解放出版社 ２０２１年
『ケアするのは誰か？ 新しい民主主義のかたちへ』ジョアン・Ｃ・トロント 著 岡野八代 訳・著 白澤社 ２０２０年